だ。トイレにたまったうちちゃんおしっこを、パットが高い。

キューマーカーでくみとってくれる。「くさーっ」「りょうたが言った。」「はんまや、くさーっ」「ってたつやが言った。」仲良し三人組だもの。

としながらも負けじと大声を出した。篠先生の顔色が変わったことに三人とも気がつかった。「くさーっ」「くっさーっ」「何回も言った。

あった。「なんということ言うの！」篠先生が真っ赤な顔で叫んだのだ。突然、身体がぶるぶるふるえている。「言われた人は、うれしいと思うの？」「失礼だ。思わないの？」「さあって」「ささって、みんなが来たらくれへんやったら、あんなの家かで、うんちゃだれになるんやないの！」「おい。篠先生って、あんなにこわい先生だからどうかへ行った。

三人組はこっそりめくばせた。いいや。知らんかった。

入園して三日、篠先生、ずっとやさしかったなあ。いうん。でも、怒らせるところわいかから、気がつくような。

おお。気をつけよう。
はっ。この人、立ち直りが早いらしいぞ。よっ
た。よかった。
「きょうは十二時に帰ります。今から、おやつを食
べます。」
竹田園長先生がおせんべいと牛乳を配てくれ
た。よかったね。
けど、おせんべい、たった一枚かよ。あ、袋にま
だ何枚か残ってるぞ。
「先生、おかげ、ありがとう。」リョウタが聞いた。
「おかわり、あらへん。ひとり一枚」と竹田園長先
生。
「でも、袋に……」
「へっ？」
「あのね……あの……きょう、げたほこ、持って帰
るんでしょ」
「はあい」
「せんせい」
はぶらしと、コップをまじって、リュックをかけ
て、水筒も肩からかけて、帽子もかぶって……みん
ながそれぞれ帰る用意をしていると、たかよが思い
つめた顔で籠先生に聞いた。
「ああゆうものを。はい」
「せんせい」
「あのね……あの……きょう、げたほこ、持って帰
るんでしょ」
「へっ？」
「あのね……あの……きょう、げたほこ、持って帰
るんでしょ」
「へっ？」
「あのね……あの……きょう、げたほこ、持って帰
るんでしょ」}

- 48 -
「えっ？幼稚園のやったん？」
「あたまりまえやん。」「えっ？幼稚園のやったん？」
「あたまりまえやん。」

「なんでも……」そこでひっくりして、たかよは、
何かに気がついた様子で聞いて。
「なんで、なんで幼稚園のなのに、たかよって、た
かよの名前が書いてあるん？」

「ああ、あれはね、みんなが幼稚園に入園してくる
前に、籠先生が書いたのよ」

「うっそーっ、たかよのお母さんが書いたんやで。」

「籠先生は、いいかげんにいやになってきたみたい。
たかよは、泣きながら自分のロッカーに座ってい
くと、うわぐつを入れる袋を持って行った。そして、
「これ、たかよのお母さんが、たかよのために作っ
てくれたんや。せやのに、籠先生が、これ、幼稚園
の も ん や っ て う んっ！

と、大泣きしながら、みんなに訴えた。
「ひどい！たかよちゃんのお母さんがたかよ
ちゃんのために、心をこめて作ったのに、それを幼
稚園のためにするなんて！あいこやなみかが口をとんがらかして龍先生を
らんだ。龍先生はあせった。
「ちょっと待ってよ。私は、そんなこと言うてへん
でー」

今度は、たかよは、はいていたうわぐつを脱い
dだ。うわぐつくうわぐつくの袋を並べて
「これも、これも、たかよって名前が書いてあるの
に、せやのに、幼稚園のや、言うたー！」

そう言うと、一段と大声を張り上げて泣いた。
「違うよねー。たかよちゃんのやんねー。かわいそ
うにねー」

って、たかよの背中をなせてやってる。龍先生
は、困ってしまった小さな声で言った。
「だって、たかよちゃんが、げたばこ、持って帰
って言うから、幼稚園のもの、持って帰ったらあ
かん、言うたんや。……うわぐつを持って帰って
言ってたんやね」

たかよが、突然、ビタリと泣き止んだ。
一瞬、部屋中がしーんと静かになった。竹田園長
先生が、まず笑い出した。わけがわかった子は笑っ
tた。何だかよくわからない子も、うるされて笑った。

（保育研究グループ）

- 50 -